神奈川における古代集落・官衙・寺の鍛冶

－神奈川の古代製鉄・鍛冶遺構－

冨　永　樹　之

1．はじめに　　2．製鉄・鍛冶遺構の事例
3．製鉄・鍛冶施設を伴う遺跡の性格　4．まとめ

1. はじめに

すこし前に、ある機会に考古学から見た神奈川の歴史をホームページで見せる企画があり、奈良・平安時代についてテスト判を簡単につくったことがある。残念ながらこの企画は保留とされたが、テスト判の作成途中、神奈川県の古代の生産遺跡についてはよく知らず大変苦労した。生産遺跡はそもそも田畑、牧、製鉄・鍛冶遺跡、窯業遺跡、製塩遺跡、木製品・石製品製作工房など多岐にわたり、簡単に把握することは困難である。他県では詳細な分析を進めている研究者・プロジェクトがあるが、神奈川県では古代のこの分野については一部しか検討がなされていない。筆者の乏しい知識で神奈川県の古代生産遺跡についてまとめるなどと大それたことは考えていないが、この地域でどのような生産遺跡が見つかっているかは確認してみる必要があろう。

本稿では鉄についてあまり知識の無い筆者が無謀にも神奈川の古代の製鉄・鍛冶遺構を集成し、どのような地域、どのような遺跡でどのような出方をするか考察してみることとした。専門の方からご意見・批判を受けることを承知であえて提示し、神奈川の生産遺跡を考える上での叩き台となれば幸いである。近年、製鉄・精錬・小鍛冶の遺構についてはその区分が研究者により違う部分があり、同じ化学分析の結果でも解釈が違うことがある。まして化学分析の無い場合では、製鉄なのか精錬なのか、または精錬なのか小鍛冶なのかまたは共用なのか区別が難しいところである。本稿で取り上げる遺跡・遺構の性格について筆者なりの解釈をしたが、専門の方からの修正を賜りたいところである。

2. 製鉄・鍛冶遺構の事例

（1）製鉄遺跡

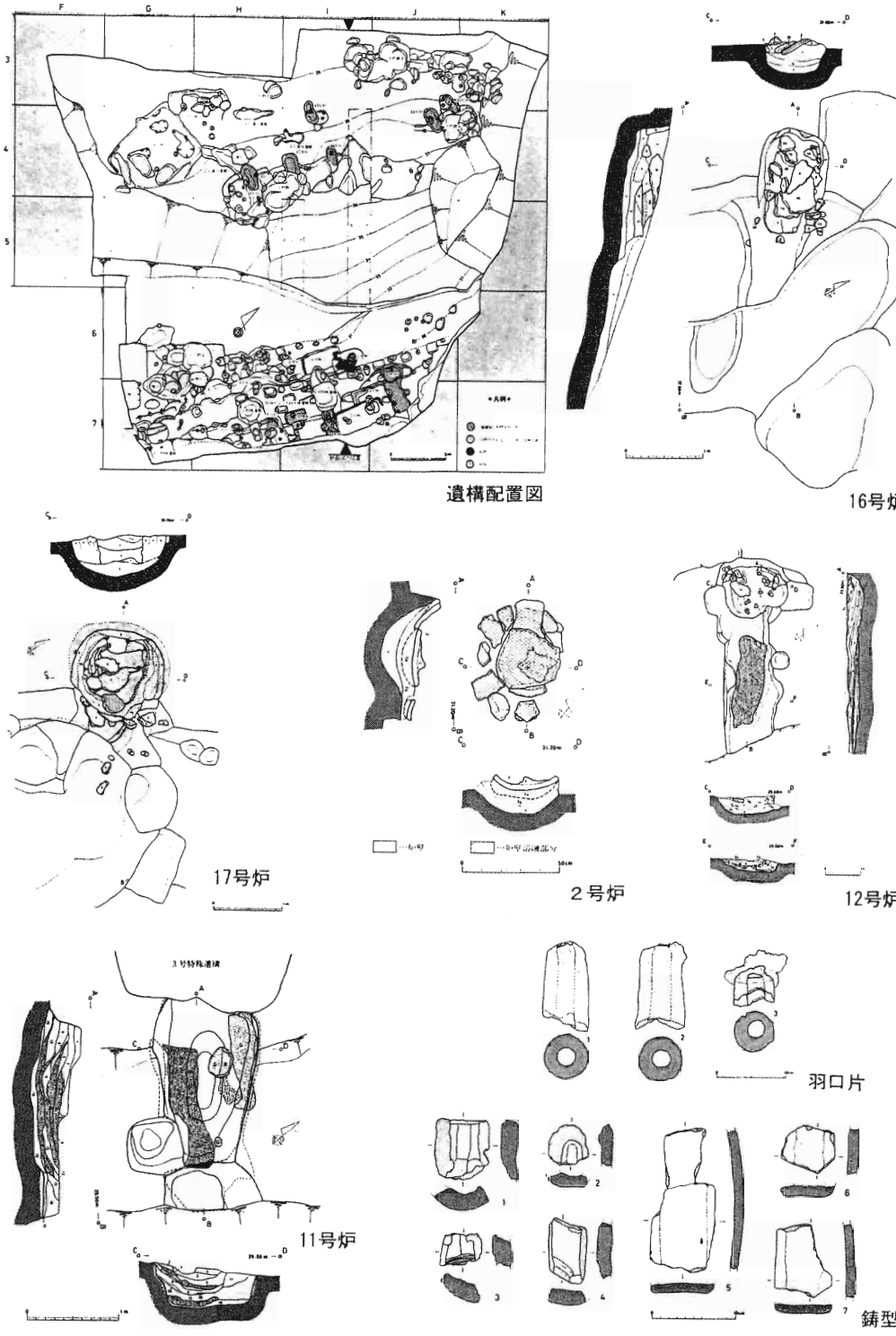
神奈川県における製鉄遺跡はきわめて少なく、同じ関東の千葉県、群馬県などと比べるとごくわずかである。関東でも西の入り口に属し、海運でも利便な位置にあることから西国からの

粗鉄搬入に頼ったと考えたくなるがなにも確証はない。

■横浜市上郷深田遺跡（第１図　平子1988）

現在、神奈川最大の製鉄遺跡と考えられるが、正式報告はまだ無く、概報のみである。南向きの勾配約18度の斜面地に二段にわたって人工的な平場を設け、報文によれば製鉄炉18基、竪穴状遺構６基（鍛冶炉を伴うもの１、砂鉄を多く出土したもの１）、特殊遺構３基、多数の土坑、また製銅炉も１基もしくは３基発見されているという。遺構は重複が激しく、遺存状況はあまり良好ではない。時期的には７世紀末から９世紀前半にかけて長期にわたって継続したと推定される。やや残りが良い16・17号炉を紹介すると16号炉は上段に位置し、埋没した古い遺構の覆土を掘り込んで構築されていた。炉本体底部を平面小判形に掘り込んでおり、左右には平場が形成されていた。炉の前部分は緩やかに傾斜している。炉本体は明確では無いが円形また円形に近い楕円形の炉が構築されていたと推定される。16号炉のすぐ近くにある17号炉はほぼ平面円形の炉壁が確認されている。炉前面は傾斜しており、赤化著しい焼土が検出された。両炉ともこの遺跡では上面すなわち新しい時期の遺構と推定され、８世紀後半から９世紀前半と考えられる。竪穴状遺構の多くは確証は無いが、工房と推定される。これら竪穴状遺構は製鉄炉や土坑との関連が予想される。鍛冶炉が検出されたのは１号竪穴で泥岩を伴った炉が鍛冶炉とされている。概報のためなぜ鍛冶炉と判断されたかは不明だが、鍛冶といっても精錬鍛冶かもしれない。また２号竪穴では床面直上から多量の砂鉄が検出された。特殊遺構や土坑についてはあまり報文で触れられていないが、「これらの遺構の性格は明らかでないが、炭焼き窯や、炉材の粘土に混入するための、砂土の採掘坑である可能性」が示されている。また２号炉は製銅炉とされており、円形の鍋底状の炉壁が残るというが、あまり具体的な資料の提示はない。同様の形状を持つ５・６号炉も製銅炉の可能性もあるとされているが明確ではない。遺物は７世紀末から９世紀前半の土師器・須恵器で炉や竪穴から出土している。特に７世紀末から８世紀初頭の畿内系土師器が４個体以上出土していることは注目される。他には羽口、鉄滓、炉壁などだが詳しい報告は無い。また３号竪穴では紡錘車も出土しており、混入でなければ完全な工房専用の竪穴では無く、通常生活も行っていた可能性がある。鉄製品は釘等が数点で小鍛冶は行われなかった可能性が高い。特筆すべきは３号炉や１・２号竪穴で鋳型が７点出土しており、鍋の獣足などの鋳型と見られている。８世紀後半から９世紀前半の遺構に伴った鋳型であり、この時期には鋳造が行われていたことがわかる。

上郷深田遺跡の炉は遺存は悪いが半地下式竪型炉であると考えられる。半地下式竪型炉については近年使用目的を製鉄だけでなく、精錬の可能性もあるとされているが、本例は製鉄とみなしていいだろう。ただし概報では化学分析も行っているとしているが具体的な結果報告は無く、「鉄の製錬にかかわると考えられる、チタン含有率の高い試料が圧倒的に多く、なかには、砂鉄から鉄塊への一連の製成過程が、凍結されたような状態で封じ込まれた鉱滓状のものも含まれている」と記載があるだけである。もっとも精錬についても一部では行われていたかもし



第１図　上郷深田遺跡　遺構配置図・製鉄炉・出土遺物

れない。製銅炉については製鉄と製銅が古代東国で併行操業された例がほとんど無いことから、やや疑問に思えるが、残念ながら報告を待つ以外にない。また鉄の鋳造が製鉄に伴ってことも興味深い。報文をそのままままとめると8世紀後半から9世紀前半にかけてそれまでの製鉄中心の遺跡から鋳造や製銅など操業が多様化したと見られている。

本遺跡の周辺では第3紀末から第4紀前半にかけての古い地層の堆積があり、多くの砂鉄が包含されているという。また谷戸や水田の水流で多くの砂鉄が現在でも採集されるといい、これらの砂鉄を原料にした製鉄遺跡であろう。

■横浜市中谷遺跡（川上1976）

横浜市港南区にあり、上記の上郷深田遺跡とは1km前後しか離れていない。1972年とかなり古い時期の調査であることと、トレンチ調査の断片的なデータであることから明確な調査結果は得られていない。報告では「鍛冶場址」となっているが、遺構が急な斜面地にあることや上郷深田遺跡との位置関係から、製鉄または精錬工程の遺跡として考えた。遺構は斜面地のトレンチ内より「泥岩塊を不整形に集積した遺構が発見され」、「この泥岩塊の上部や泥岩に挟まれたような箇所から相当量の鉄滓が抽出された。更に鞴の羽口で筒先の部分3個が高台付灰釉片底部と共に散在していた。」また上屋、竪穴については検出されていないが、近くの1基の柱穴の存在から外屋柱の可能性を触れているが確証はない。炉本体かどうかも不明だが、上郷深田遺跡でも泥岩を伴った「鍛冶炉」が検出されている。短期のトレンチ調査であったため鉄滓が多く出始めた面で調査が停止した可能性が高い。

上郷深田遺跡の箇所でも触れたようにこの一帯には砂鉄の富んだ地層が広がり、『新編武蔵風土記稿』でも「金」がつく地名が散見され、鉄生産にゆかりがあると言う。また両遺跡近くに現在でも「鍛冶ヶ谷町」「鍛冶ヶ谷団地」などの地名が見られる。中谷遺跡は灰釉陶器が混在していることから平安時代の遺構と推定されるが、この横浜市港南区と栄区の境周辺には古代の製鉄遺跡が多く展開している可能性がある。

（2）鍛冶遺跡

大きく分けて精錬工程と小鍛冶工程に分かれる。製錬の後、炭素の多い粗鉄を鋼に変えるのが精錬工程だが、工房によっては小鍛治を兼ねる場合もあり、明確に分別できるわけでもない。ただし精錬工程が中心の場合は高い火力が必要なことから比較的大きな工房で操業されていたと考えられるが、大きな工房に限定されるとは言い難い。

a）精錬工程を中心とする遺跡

精錬炉については化学分析や椀形滓の出土などから判断される。平塚市坪ノ内遺跡と六ノ域遺跡は数百メートルしか離れておらず，相模国府関連の工房とされている。

■平塚市坪ノ内遺跡（第2図　林原1996）

相模川の自然堤防・砂丘上に位置する坪ノ内遺跡は、相模国府が存在した推定される平塚市四之宮地区内に所在する。四之宮地区では多くの国府関連の遺構が発見されているが、国庁は

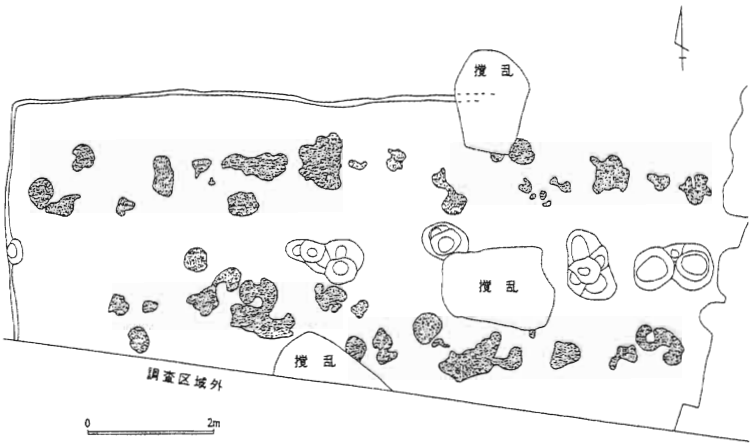
まだ発見されていない。本遺跡については概報のみの報告である。鍛冶工房はいわゆる連房式鍛冶工房で長方形竪穴のプランを持ち、遺構は調査区外に広がっている。東西約12m以上、南北約５m以上で竪穴内に二列に並んだ径約40cm前後の平面円形の鍛冶炉が検出された。鍛冶炉は重複が著しく約70基検出された。遺構内からは明確な製品、工具の出土はなかったが、羽口、鉄塊系遺物、鍛造剥片、鉄滓などの出土品が確認された。また佐々木稔氏は椀形滓が鍛冶炉底面に残った好例として坪ノ内遺跡を紹介している（佐々木・赤井ほか2002）。この鍛冶工房が精錬作業が主体であったと考えていいだろう。出土土器から８世紀末から９世紀初頭の時期が推定されている。また同じ調査のＡ区でも、長方形の竪穴状遺構２軒が検出されたらしいが、「鍛冶工房跡の可能性がある」としか触れられていない。

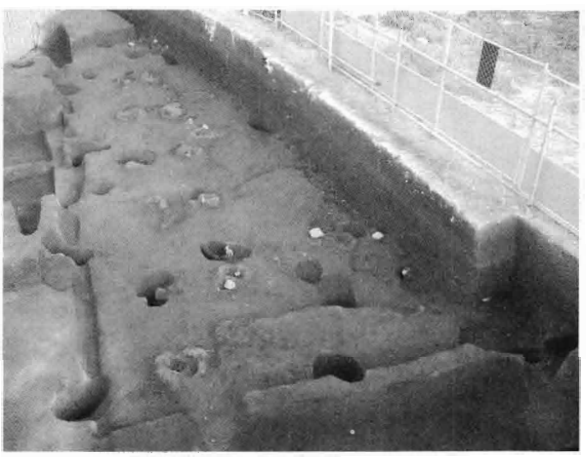
■平塚市六ノ域遺跡（第２図　柏木・依田2003）

坪ノ内遺跡同様、四之宮地区にある六ノ域遺跡は、坪ノ内遺跡から西に300m程離れた遺跡で、やはり国府に関する官的な工房と考えられる。この遺跡は現在整理作業中で、やはり概報から内容を紹介する。坪ノ内遺跡の工房とプランがよく似ており、同じ連房式鍛冶工房である。平面長方形の竪穴で、東西は約13m・南北は調査区外までのびて約５mになり、深さは30cmほどである。周囲の壁に切り込む形で柱穴が配されている。鍛冶炉は計18基、うち16基が２列に並んでおり、２基１対で整然と配置されている。鍛冶炉は大きさ径40cm前後であり、いずれも粘土による構築される。平面円形で皿状を呈し、東西方向には掻き出し口があり、南北には羽口を装着する小溝がある。東西の掻き出し口には掻き出した炭の集中があり、ピット状の浅いくぼみをなす。北列の炉が西の窪みで炭化物が多く、南列は東の窪みで炭化物が多く存在し、北列と南列は逆の現象が観察される。竪穴の西壁際には低いテラス状の廃滓場があり、椀形滓や羽口片、鉄滓が多量に出土した。工房の仮捨て場と判断されるが、工房から離れた土坑にも椀形滓や羽口片、鉄滓が多量に投棄してあり、仮捨て場から運ばれたと推定される。椀形滓の出土から精錬作業を中心とした工房だったと推定される。工房の出土品は椀形滓や羽口片、鉄滓（粒状滓、鍛造剥片）の他に砥石、鉄鏃、釘、刀子、金銅製飾金具、灰釉陶器、土師器、須恵器などがある。土器から９世紀頃の年代が推定されている。時期的にも坪ノ内遺跡の工房と近く、竪穴のプランや炉の大きさまで似ている。

■逗子市池子遺跡群№５地点（第３図　桝渕・植山1998）

池子遺跡群は丘陵部の谷戸を中心として展開する遺跡群だが、№５地点の古代の小集落も谷の微高地に位置する。遺構はその谷戸の谷奥の緩斜面に存在する。名称は「野鍛冶跡」で報告では製鉄主体となっていた。しかしながら砂鉄の検出が無く、折り返されたような鉄片が有ることから、精錬作業が中心ではないかと推定した。２基検出されているが、２号野鍛冶跡は船底状の掘り込みだけで炉が無く、近接する１号の関連施設かと記載されている。１号野鍛冶跡は残存が悪く、約1.1m×0.8mの楕円形の炉床が残存するのみで著しく赤化していた。周辺には多くの鉄滓が出土し、炉床から約３m離れた場所にピット状の鉄滓・焼土捨て場が存在する。





第２図　坪ノ内遺跡連房式鍛冶工房（上段）と六ノ域遺跡連房式工房と鍛冶炉（下３枚写真）

鉄滓は2662点で、27kgの量だというが、残念ながら、鉄滓の大きさについては触れているが形状は記載がない。また折り返されたような鉄片や羽口片が出土している。遺存が悪いため明確にはいえないが、竪型炉である可能性がある。土器類から９世紀後半の操業が推定される。近くの１号竪穴住居址と同年代であり、№５遺跡の小集落と関わりのある遺構と判断される。竪型炉については通常製鉄遺構とされるが、精錬工程にも関わっていたとされる説から想定した。

■茅ヶ崎市下寺尾西方Ａ遺跡（第３図　村上・宍戸2003、佐々木2000）

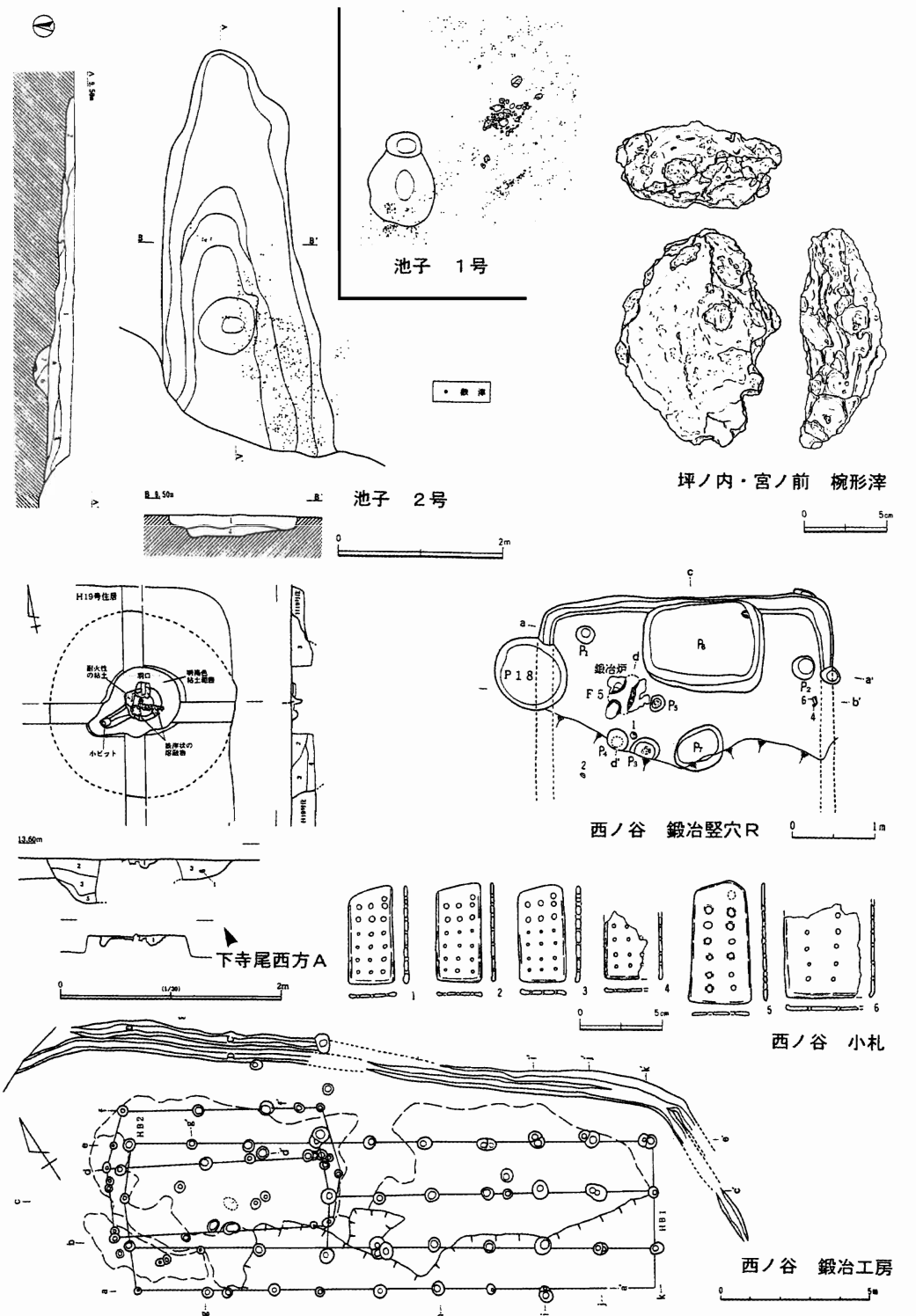
台地上に展開する遺跡で高座郡衙の政庁と正倉、館が発見されている。郡衙は８世紀初頭のきわめて短期間に存在したという。郡衙成立前と廃絶後に竪穴住居が建てられており、報告に従えば鍛冶炉は郡衙廃絶後の竪穴住居群に伴うと考えられる。Ｈ１号鍛冶炉は上屋の痕跡は無く、露天または平地建物だったと考えられる。炉は径30cm前後の円形の炉床が検出されており、炉床北側には羽口片があり、鉄滓状の溶融物が存在する。炉床には長さ28cmの小溝と小ピットが付随するが、炭などの掻き出し用の溝だろうか。底面の粘土は長軸87cm、短軸59cmのイチジク形に広がっており、掘方はさらに径1.6mの範囲に拡大すると推定される（保存のため完掘していない）。鉄滓は径５～８mmの湯玉状のものや薄片状のものなど様々だが、報告の際の分析では、精錬工程によって生み出されたものとされている。鍛冶炉は竪型炉と復元されている。また鍛冶炉から数十m離れたＨ１・２・４竪穴住居の覆土からも鉄滓が出土しており、共通した組成から同一の炉のものと分析されている。竪穴住居出土の鉄滓には大型の椀形滓が含まれる。時期的には７世紀末の竪穴住居を鍛冶炉が切っていることと、１・２・４号竪穴住居の年代から８世紀第二四半期の頃と推定される。

■伊勢原市坪ノ内・宮ノ前遺跡（第３図　宮坂・宍戸2000）

この遺跡では鍛冶遺構自体が見つかっていないので参考として記す。古代の竪穴住居が十数軒検出されているが、鍛冶関連遺物が出土したのは集落よりやや離れた谷戸の入り口で検出された３号溝である。椀形滓23点、鉄滓271点が出土したほか、羽口片や鉄塊系遺物、鉄釘、銅地金、銅碗の破片や坩堝、９世紀初頭から中頃の土器類が出土した。報告に伴う化学分析ではこれらの鉄滓や鉄塊系遺物は精錬工程から出たものとされており、鉄釘は作られた鋼を使って加工されたものとしても矛盾しないという結果が出ている。興味深いのは３号溝からは瓦塔片や銅碗破片などがから近隣に古代の仏堂施設の存在が予想されており、これらの鍛冶関連遺物がその寺の建立に関わる鍛冶の廃棄物と考えられていることである。寺に関わる鍛冶として精錬鍛冶が行われている可能性があるわけである。また銅地金や銅碗については銅鋳造に高い技術が必要なことからこの遺跡では行われていないと推定されている。

■横浜市西ノ谷遺跡（第３図　坂本1997）

平安時代中・後期の鍛冶遺構である。10世紀後半に竪穴状遺構を鍛冶工房とし、３基の建て替えがある。特に竪穴Ｒは遺存が良く、泥岩切石を配した鍛冶炉が発見されている。炉内部は50cm×25cmの範囲で真っ赤に被熱し、鉄滓、微細薄片を含んでいた。また竪穴内から土器坩堝、



第3図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺物（1）

須恵器坩堝、羽口なども発見されている。11世紀になると溝などで区画された掘立柱建物の鍛冶工房に変化する。鍛冶炉は炉床のみだけだが4基が発見されており、1基づつ作り替えられたのだろう。12世紀には掘立柱建物の鍛冶工房は9間×2間片側庇付きの大型建物に発展し、このころ小札の出土から大鎧の他、武器の製作を行っていたと推定されている。化学分析から精錬鍛冶、小鍛治の他、銅細工なども行っていたようだ。遺物は鉄滓（椀形滓、鉄塊系遺物、微細薄片を含む）、小札、鏃、刀子、馬具、釘、鎌、金鋏、羽口片、台石、砥石などである。

b）小鍛治が主体の遺跡

いわゆる集落などの小鍛治を想定したが、明確な基準があるわけではなく、小規模な工房、竪穴住居などで製品製作を主体としている例を考えた。小規模な工房の場合でも、精錬を共に行っている例もややあるようである。

事例が多いため、第1表にまとめたが、漏れはあるかもしれない。

（3）鋳造を中心とした遺跡

鉄の鋳造を主体的に行う遺跡は古代ではあまり無く、製鉄遺跡や鍛冶遺跡で兼用していることが多いようである。実際1節で紹介した上郷深田遺跡では鋳型があり、製鉄と共に鉄の鋳造も行っていることがわかる。他に鋳造遺構が見つかった遺跡はないのだが、鋳型に関して注目されるのが厚木市愛名宮地遺跡である。

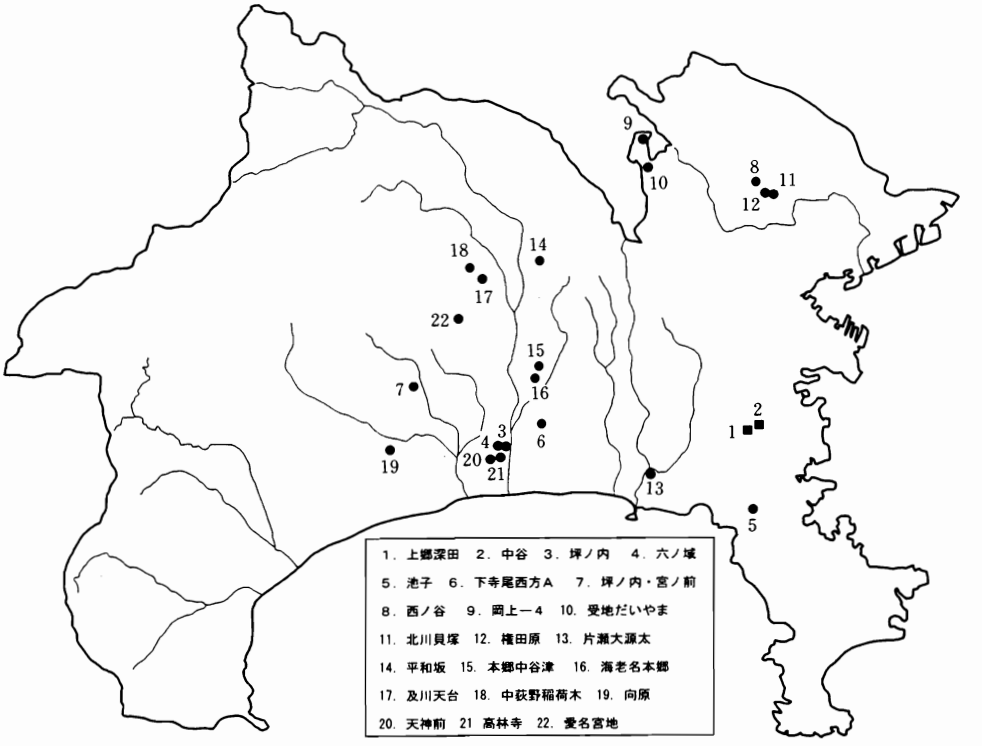
■厚木市愛名宮地遺跡（第8図　境・浅野ほか1999）

谷間の平坦地に古代の仏堂施設や関連した竪穴住居が発見されている。仏堂はいわゆる「村落内寺院」の範疇で捉えられるもので、詳細は避けるが仏堂として布掘りの大型掘立柱建物が8世紀後半に建てられ、9世紀に同じ位置に礎石建物として建て替えられている。瓦塔や仏鉢形土器、灯明皿、「寺」墨書土器など多くの仏教関連遺物を出土している。注目されるのはこの礎石建物から出土した鋳型2点である。獣足が付く鉄鍋の口縁部と獣足部の鋳型である。かつては筆者は獣足から仏教関連の遺物と考えたが、このような形態の鉄鍋は古代では一般的なものらしい。それはともかく、この仏堂周辺に鋳造（おそらく鍛冶をともなっただろうが）遺構が存在していたと考えられる。仏堂からは大量の大型釘が発見されており、建立時、建て替え時に鍛冶施設があったと考えても不思議ではない。このような形式の仏堂近くで鍛冶・鋳造が行われていたのだろう。

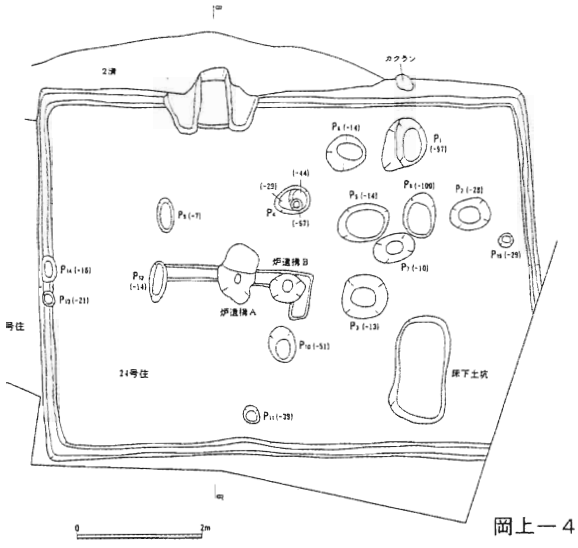
第１表　小鍛冶主体の遺跡一覧表

遺跡名	遺構名(工房遺構種)	工房の規模	鍛冶炉の形状	出土品	時代	所属遺跡	備考	文献	図番号
川崎市岡上－４遺跡２地点	H24号住居址(竪穴住居)	長方形 8m×6m	２基　A－径35cmほどの不整円形、擂鉢形、粘土 B－掘方のみ、関連区画小溝	鉄滓(多くは炉周辺)、羽口、土器類	8世紀中頃	寺院関連集落	炉２基の新旧不明、寺院関連か。カマドあり。	河合2001	第５図
横浜市受地だいやま遺跡	Ｊ区鍛冶関連遺構(テラス状遺構　竪穴も含む)	長方形テラス 12.0m×5.0m以上	7基　径30～70cmの円形、または長方形　併存ではなく同時は２基程度　テラスは簡単な上屋があり、竪穴状工房もある。	鉄滓、羽口	９世紀後半～10世紀前半	一般集落	大型掘立柱建物群、墓坑群との関連あり。精錬作業も含むか	伊藤ほか1986	第５図
横浜市受地だいやま遺跡	Ｄ区鍛冶関連遺構(半竪穴状遺構またはテラス)	方形 4.8m×3.0m	２基　１基は90cm×50cmの「レ」字形、１基は120cm×110cmの馬蹄形　共に痕跡程度	壁体、砥石、鉄滓	11世紀	一般集落	廃棄土坑あり。精錬作業もふくむか。	同上	第５図
横浜市北川貝塚	H2号住居(竪穴住居)	方形 約4m×4m(概算	住居中央に径１mの浅いくぼみ。そのくぼみの一部が被熱した炉	鉄滓、鉄片	9･10世紀	一般集落	概要のみ　カマドあり	坂本･鈴木1984	第６図
横浜市権田原遺跡	小鍛冶関連遺構詳細不明	不明	不明	不明	9･10世紀	一般集落	概要のみ	鈴木1990	
藤沢市片瀬大源太遺跡	タタラ遺構(平地建物又は露天)	痕跡なし	長径1.36m×短径0.65mの隅丸長方形、長断面は船底形、焼土や凝灰岩ブロック	鉄滓	９から10世紀	一般集落		寺田ほか1997	第６図
座間市平和坂遺跡	第２号住居址(竪穴住居)	長方形 3m×4.5m	鍛冶炉かどうかは明確にわからない。径0.5m前後	取瓶	8後～9前	一般集落または駅関連	詳細な記載はないが、取瓶の出土や竪穴の形状めずらしい炉の存在から推定。カマドもある。	小池ほか1993	第６図
海老名市本郷中谷津遺跡	第４号住居址(竪穴住居)	方形 3m×3.1m	0.5m×0.6m　楕円形断面鍋形	鉄滓、羽口片	10世紀	拠点集落	カマドはない。	滝沢1993	第６図
海老名市海老名本郷遺跡ＳＯＥ－Ⅱ地区	20号住居址(竪穴住居)	長方形 5.7m×3.0m	径0.4mの円形　深さ25cm、断面鍋底形、粘土貼り付け	鉄滓15(径１cm前後の湯玉状も含む)	平安時代	拠点集落	カマドはない。	合田ほか1987	第６図
厚木市及川天台遺跡	第１号鍛冶址(平地建物または露天)	痕跡なし	1.2m×0.7mの楕円形の炉を中心に3.5～5.8mの小溝四条がつく。２号に隣接	椀形滓、羽口片12、土師器･須恵器	9後～10初	一般集落	周辺の９後の住居から多くの鉄滓。精錬作業も行うか。	香村ほか1997	
厚木市及川天台遺跡	第２号鍛冶址(掘立柱建物)	2間×2間(3m×3.5m)	３基の炉址。いずれも50～80cmの円形。ロームの掘方に簡単な粘土。新旧不明	椀形滓、鉄滓、羽口片53	9後～10初	一般集落	周辺の９後の住居から多くの鉄滓。精錬作業も行うか。	同上	第６図
厚木市中荻野稲荷木遺跡	20Ｄ区第１号竪穴住居址(竪穴住居)	ほぼ方形 4.0m×3.5m	2基の炉址。1号は径90cm前後の円形で粘土貼り付け、2号は径142cm×120cmの円形で底部粘土貼り付け	鉄滓、羽口片４、	平安時代	一般集落	カマドなし	北川1999	第７図
平塚市向原遺跡	39号住居址(竪穴住居)	不整方形 3.0m×3.3m	２基の炉址。１号は径約30cmの円形、２号は径約40cmの円形。掘方に粘土貼り付け。２号の方が古く、炉とピットと組んだ可能性。	鉄滓3000点余(椀形滓を含む)、羽口87、砥石、鉄製品56(釘、刀子、鏃など)、鉄塊、不明鉄板、鉄棒、土器類	9世紀中頃から後半	拠点集落	カマドなし。通常の住居と異なり竪穴壁上を柱穴が巡る。北東隅を鉄滓置場、南西隅を材料置場に、南東隅を製品置場に利用。精錬作業も行うか。	清水･市川ほか1987	第７図

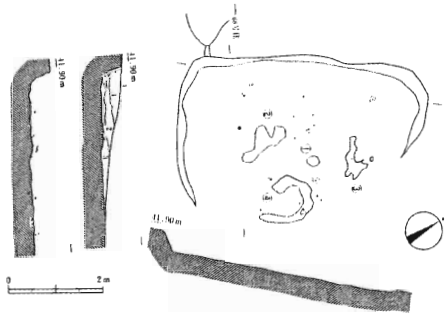
遺跡名	遺構名(工房遺構種)	工房の規模	鍛冶炉の形状	出土品	時代	所属遺跡	備考	文献	図番号
平塚市天神前遺跡第7地点	1号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 4.7m×3.7m	竪穴内に2.9m×1.2mの長方形土坑状の落ち込み。中に2カ所の焼土(径30～40cm　炉か)と直交する長方形土坑(1.6m×0.5m)鞴と鍛冶炉の跡か。	鉄滓215(椀形滓を含む)、羽口43、砥石、土器類	8世紀	国府関連集落	カマドあり。精錬作業も行うか。	明石1997	第7図
平塚市天神前遺跡第7地点	2号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 3.3m×2.6m	カマドで鍛冶か	羽口22、鉄滓44、土器類	9世紀後半	国府関連集落	明確に鍛冶工房とは言い難いが、報文によった	同上	
平塚市天神前遺跡第7地点	1号不明遺構(竪穴状遺構)	不整隅丸方形 3.0m×3.4m	壁際のピット(径60～70cm)が鍛冶炉か	鉄滓128、羽口16、土器類	9世紀後半	国府関連集落	カマドなし	同上	第7図
平塚市天神前遺跡第10地点	6号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 3.8m×4.0m以上	床中央に鍛冶炉か　詳しい報告なし	不明　多量の鉄滓・羽口という		国府関連集落	概要のみ　鍛冶工房とは報文による	栗山・菅沼1997	
平塚市天神前遺跡第10地点	7号竪穴住居址(竪穴住居)	方形 3.8m×3.5m以上	床中央に鍛冶炉か　詳しい報告なし	不明　多量の鉄滓・羽口という	9世紀後半	国府関連集落	概要のみ　鍛冶工房とは報文による	同上	
平塚市天神前遺跡第10地点	8号竪穴住居址(竪穴住居)	長方形 3.8m×3.8m以上	床中央に鍛冶炉か　詳しい報告なし	不明　多量の鉄滓・羽口という		国府関連集落	概要のみ　鍛冶工房とは報文による	同上	
平塚市高林寺遺跡第6地点	SX01鍛冶工房址(露天または平地建物)	痕跡なし	2基あり。1号炉址は平面舟形、長軸3.9m、短軸1.0m、深さ45cm～60cm、粘土と焼土。2号炉址は不整円形、1.6m×1.4m、深さ25cm。1・2号の新旧不明。2号は掘り足りないか。	鉄滓781、羽口58	9世紀後半	国府関連集落	詳細不明	小島ほか1988	第8図



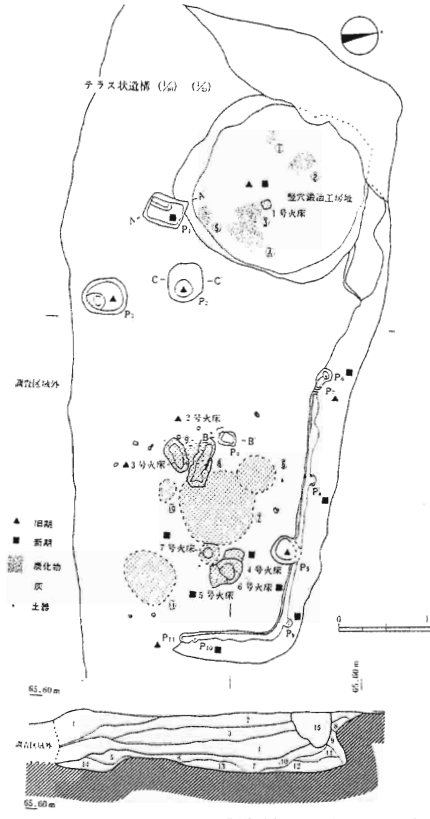
第4図　神奈川県の製鉄・鍛冶遺跡位置図



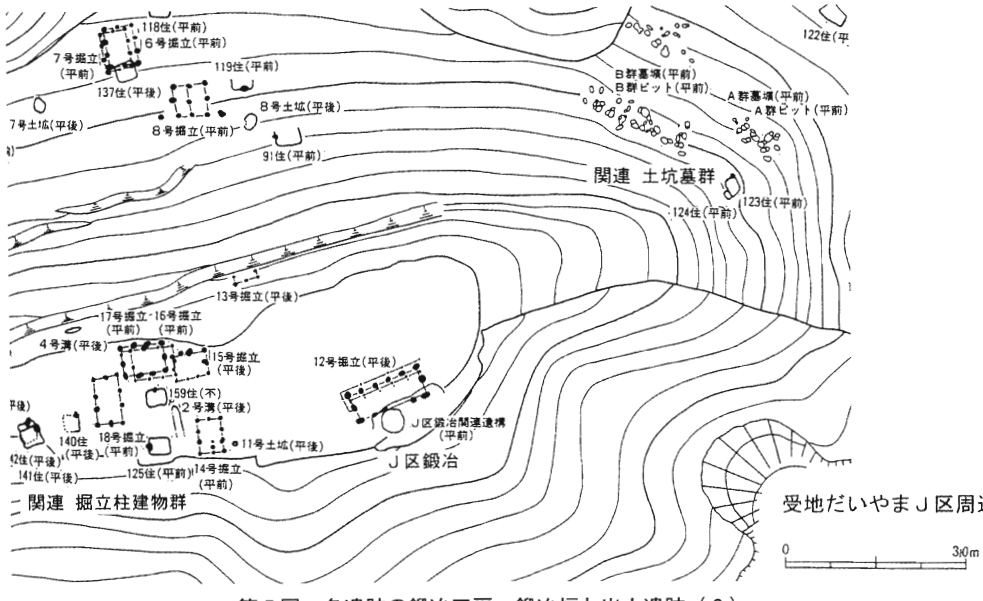
岡上－4



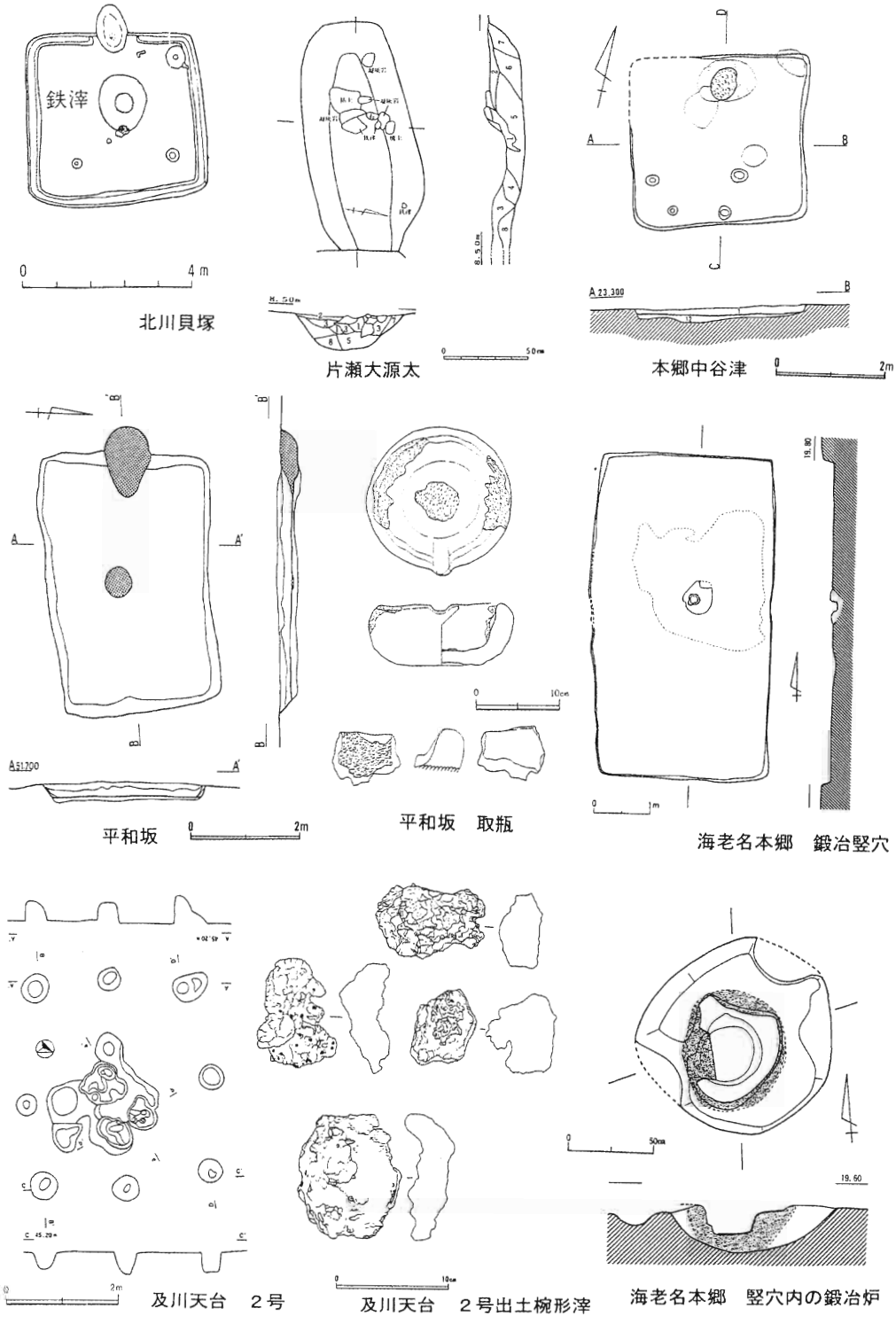
受地だいやま　D区鍛冶



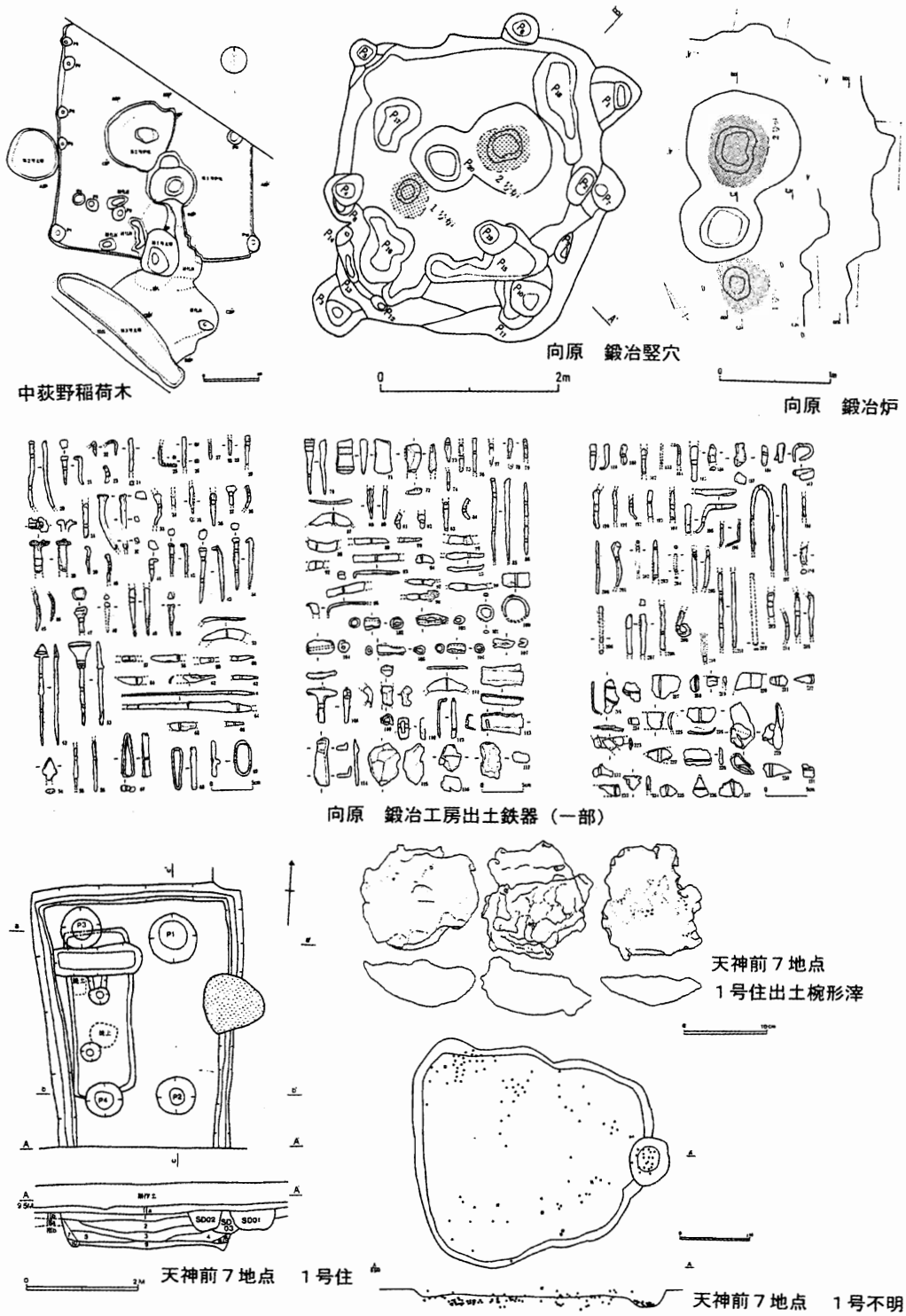
受地だいやま　J区鍛冶



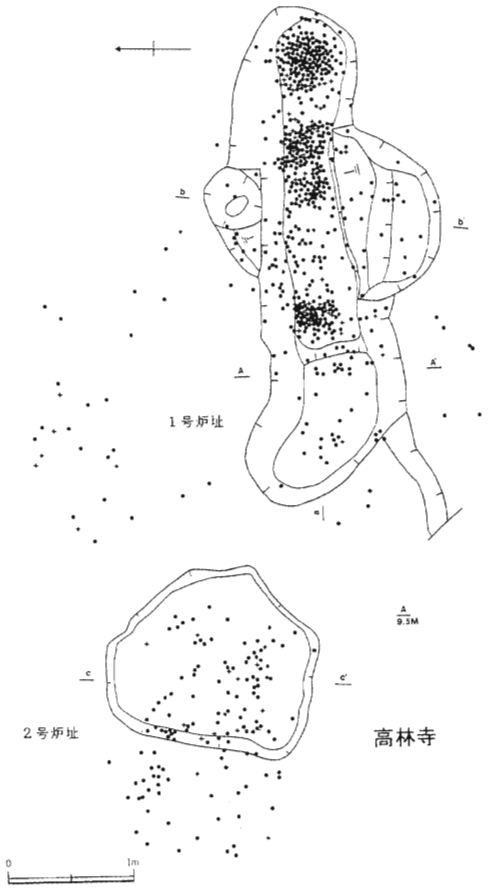
第５図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（２）

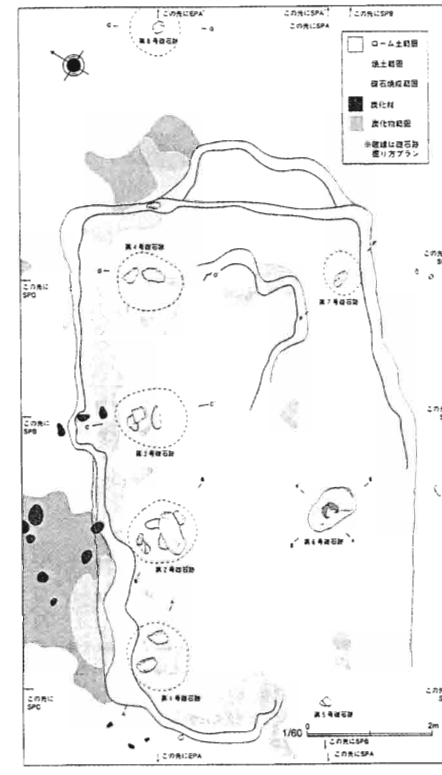


第６図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（３）



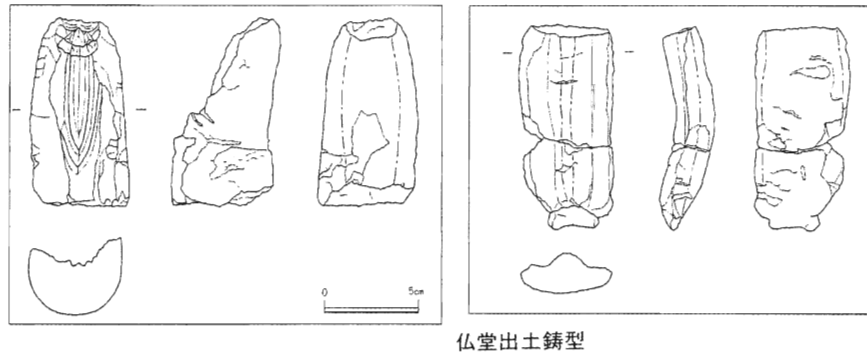
第７図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（４）





愛名宮地　仏堂

仏堂　出土の仏鉢形土器と「寺」墨書土器



仏堂出土鋳型

第８図　各遺跡の鍛冶工房・鍛冶炉と出土遺跡（５）

3. 製鉄・鍛冶施設を伴う遺跡の性格

（1）遺跡の種類による分類

さて大変大まかな区別で製鉄・精錬・小鍛冶・鋳造について遺跡を紹介してみたが、本稿の目的は製鉄・鍛冶関連遺構の位置した遺跡の性格を考えることにある。集落・官衙・寺院・専業的生産遺跡・その他に分けて考え直してみよう。

集落関連の鍛冶

池子遺跡群№5地点、受地だいやまＪ区・Ｄ区鍛冶関連遺構、北川貝塚、権田原遺跡、片瀬大源太遺跡、平和坂遺跡、本郷中谷津遺跡、海老名本郷遺跡ＳＯＥ－Ⅱ地区、及川天台遺跡、中荻野稲荷木遺跡、向原遺跡

官衙関連の鍛冶

下寺尾西方Ａ遺跡、六ノ域遺跡、坪ノ内遺跡、天神前遺跡、高林寺遺跡、（平和坂遺跡）

寺院関連の鍛冶

愛名宮地遺跡、宮ノ前遺跡、岡上－４遺跡第４地点

専業的生産遺跡

上郷深田遺跡、中谷遺跡（疑問あり）、西ノ谷遺跡

と分けてみた。専業的生産遺跡というのは数世代にわたる生産専門の遺跡を考えた。六ノ域遺跡や坪ノ内遺跡も専門性が高いが官衙の付属性が高いことからそちらに入れた。これらの遺跡分類に沿って概観してみよう。

（2）集落関連の鍛冶

池子遺跡群№5地点、受地だいやまＪ区・Ｄ区鍛冶関連遺構、北川貝塚、権田原遺跡、片瀬大源太遺跡、平和坂遺跡、本郷中谷津遺跡、海老名本郷遺跡ＳＯＥ－Ⅱ地区、及川天台遺跡、中荻野稲荷木遺跡、向原遺跡を取り上げた。工房の種類で区分してみたい。

竪穴住居、竪穴の例	北川貝塚、平和坂、本郷中谷津、海老名本郷、中荻野稲荷木、向原
掘立柱建物の例	及川天台２号鍛冶
露天または平地の例	片瀬大源太、及川天台１号鍛冶、池子
その他	受地だいやまＪ区

このように竪穴や露天（または平地住居）のものが多く、小規模な工房が多い。竪穴の大半はカマドが無いため、やや専門性があったことは伺えるが、鍛冶で生計を立てた職人が集落にいたかは疑問である。炉の被熱もさほどではなく、炉の数も少なく、鍛冶道具の出土もまれなため、半農半工状態だったのではないか。精錬作業を行っていた可能性があるのは、池子、受地だいやま、及川天台、向原遺跡などだが以上のうち、池子以外は椀形滓が出ている。大鍛冶

と小鍛冶を併用していた例は集落の小工房でもあり得たのだろう。しかし集落内の鍛冶工房の主体はやはり小鍛治にあったと推定したい。

古代集落において鍛冶工房が小規模な単位に分散する傾向は佐々木稔氏らによってすでに指摘されている。つまり集落内に小規模な鍛冶炉を持った小竪穴住居等が鍛冶を行うということである。神奈川県の大集落でも鍛冶工房が発見された例はさほど多く無いが、鉄滓や羽口片のみが遺構外から発見される例はかなり多い。例えば大集落として知られた厚木市鳶尾遺跡や海老名市上浜田遺跡、秦野市草山遺跡、秦野市下大槻峯遺跡、小田原市三ッ俣遺跡では鍛冶遺構は発見されなかったが、鉄滓または羽口等が出土している。つまり大規模集落の全てとは言わないにしても多くの遺跡で一時的なものも含んだ鍛冶が行われていた可能性はある。つまり地表などで痕跡が残りにくい簡単な鍛冶作業などもあり得たのではないだろうか。それは流しというか拠点集落から巡回するように鍛冶職人が出張した形は考えられないだろうか。

また鍛冶遺構が検出された集落は大半が大集落またはある程度の規模を持った集落である。孤立したような住居に鍛冶遺構はまれである。これは半農半工とはいえ、職人の数は少なく、拠点集落に在住していたのだろう。

集落の鍛冶遺構がほとんどは小規模なものだが、受地だいやま遺跡Ｊ区鍛冶遺構はテラス状の遺構に竪穴の工房や炉が配されるやや規模の大きいものである。この鍛冶遺構はすぐ近くにある規模の大きい掘立柱建物群や土坑墓群と関連があるもので（第５図下段）、富農クラスの鍛冶工房経営が予想される。集落内部にはこのような形態の鍛冶施設もあり、このような施設が後で触れる西ノ谷遺跡のように鍛冶の専業化につながるのかもしれない。

（３）官衙関連の鍛冶

相模国府はある時期平塚市の四ノ宮にあったことは定説化しているが、その四ノ宮地区にある六ノ域遺跡と坪ノ内遺跡は共に類似した規模の連房式鍛冶工房が検出され、注目される。長方形の竪穴に二列に炉が並列するもので神奈川県では初めてである。時期的にも共に９世紀であり、国府に関連したものであろう。事例紹介でも記したように精錬作業が中心の工房であるが小鍛治も行っていたかどうかは正式報告を待ちたい。発掘調査の進んでいる平塚では国府および関連施設、そして国府周辺の集落は９世紀頃は数千人の人口があったと推定されており、これらの多くの建物の建設、建て替えや人々の生活道具に絶えず大量の鉄の鉄が必要だったはずである。多量に持ち込まれた粗鉄を鋼とするのに国衙主導の直営工房がこのような形で生産を行っていたと考えられる。問題はこの二遺跡の工房の時期である。現在、相模の平塚国府の成立を８世紀とみるか、９世紀前葉とするかで対立がある。もし坪ノ内遺跡のように９世紀初頭に大規模な工房があちこちに建てられていたとしたら、一体何の理由なのか興味深い。それは国府の移転なのか、弘仁地震からの復興なのか、軍団の活動（蝦夷討伐）なのか様々な憶測が考えられる。ただし特別な出来事が無くとも、通常の需要に応えるのにも連房式の工房があってもおかしくはない。

また平塚の国府周辺集落には多量の鉄滓や羽口が発見されており、表で表したように四ノ宮の天神前地区で竪穴を中心とした鍛冶工房が発見されているが、小規模な工房である。四ノ宮のなかで天神前地区および隣接する神明久保、高林寺地区はかなり鉄滓や鍛冶関連遺物が多く出土する一帯で、国府周辺の鍛冶工房が集中していた可能性がある。もっとも工房は小型であることから精錬作業も一部で行っていたが、小鍛冶が中心であり、小型釘や生活道具の生産が中心だったのではないだろうか。連房式の工房で精錬が主に行われ、やや離れた神明久保や天神前地区で小鍛冶が行われたという国府周辺での分業が成立していたとすれば興味深いが、そのような議論ができるほど事例がそろったわけではない。

また郡衙に伴う可能性の鍛冶として西方A遺跡を挙げたが、正確にはこの地点における郡衙は鍛冶遺構の成立の直前、つまり8世紀第二四半期前半に廃絶しているという。しかし8世紀第二四半期後半の鍛冶炉の存在やなんらかの作業施設と考えられる竪穴（H4号住）の存在は通常の集落とは性格がやや異なった印象を受ける。郡庁の維持期間についてすでに何人かの研究者（明石新氏ら）の疑問が出されているが、郡衙の正庁域はこのころまで機能しているのではないだろうか。

さらに駅家についてであるが表で示した平和坂遺跡は主軸をあわせた大規模掘立柱建物群の存在から東海道の「夷参駅」になる可能性が指摘されている。その場合は鍛冶工房は駅関連の可能性があるが、駅自体が確定したわけではないため、「集落関連の鍛冶」としておいた。

（4）寺院に伴う鍛冶

川崎市の岡上廃寺は仏堂自体の調査はされていないが、使用した瓦や瓦窯の調査、周辺集落の岡上遺跡の調査から8世紀前半に建立されたと推定されている。本格的な伽藍ではなく、単堂形式の寺院と考えられている。鍛冶遺構は周辺集落の岡上遺跡の竪穴住居に鍛冶炉が設けられているものである。寺と集落の結びつきは強く、竪穴住居からの「寺」墨書土器や大量の灯明皿（法会や読経に使われる）出土からも伺える。鍛冶遺構の年代が8世紀第二四半期と寺の創建期に近いことから仏堂の建設または改修に関わった可能性がある。建立時に多量の釘の製作や工具の製作・修理などに工房が活動していたことは十分に考えられる。

同じように宮ノ前遺跡では寺も鍛冶施設も見つかっていないが、溝状遺構から多量の鉄滓と鍛冶関連遺物および仏教関連遺物が発見されていることから寺と鍛冶の関連が推定されている。これも仏堂建設に伴って周囲の鍛冶施設で釘などを製作した可能性がある。

愛名宮地遺跡では鉄鍋の鋳型が仏堂から出土していることから寺の生活道具を周囲の施設で鋳造している可能性が高い。おそらく存在形態から考えれば鍛冶と鋳造が共に行われていたのだろう。

私見では岡上廃寺は小豪族クラスの氏寺、宮ノ前遺跡と愛名宮地遺跡は富農や村落有力者建立の寺などと勝手に解釈しているが、いずれにせよこのような寺の建設、維持には釘をはじめとした鉄製品製作のために鍛冶施設が周辺に設けられたと考えておきたい。

（5）専業的な鍛冶・製鉄施設

専業的鍛冶・製鉄遺跡というのは数世代にわたる生産専門の遺跡を考えた。神奈川の古代においてはあまり例がないが、先に提示した上郷深田遺跡は数少ない専業的な製鉄遺跡であろう。7世紀末から9世紀前半の長期間にわたって斜面地に遺構を積み重ねており、時期的に律令体制の成立期から最盛期にあたっているため、地方官衙の支配下にあり、律令体制に組み込まれた製鉄遺跡と考えている。この周辺は砂鉄の多く採集できる一帯であるため、同じ地域に属する中谷遺跡も不備のある調査結果ながら同じ性格の遺跡と判断した。

また平安時代中・後期の例だが西ノ谷遺跡は10世紀後半から12世紀にわたる専門的な鍛冶屋敷であり、小札や鏃の出土から地方武士の鎧・武器の製作を行っていたと考えられている。集落の鍛冶の節で触れた10世紀の受地だいやま遺跡J地区鍛冶遺構のように富農の支配下にある鍛冶施設が、地方領主の武装化に伴い西ノ谷遺跡のように専業化したとするには、まだ類例が乏しいかもしれないが可能性は十分にある。

4. まとめ

神奈川の鍛冶・製鉄遺跡を集落関連・官衙関連・寺院関連・専業的遺跡にわけて概観した。

集落遺跡では従来言われているように、小型の竪穴・平地建物（または露天）を工房とした小さな単位での鍛冶がやや大きな集落に見られた。しかし多くの大集落には鉄滓・羽口が出土しても鍛冶工房は無い場合が多く、その場合は一時的な巡回の鍛冶職人も想定した。また集落内の富農、有力者に属する鍛冶工房も確認された。集落内の小工房でも椀形滓が出土する例はかなりあり、もし椀形滓の認定に誤りがなければ大鍛冶と小鍛治を共に行っていた工房が少なからずあることになる。

官衙では精錬作業を中心とする連房式工房が二例、平塚国府周辺で確認され、国衙直営と予想した。また別の地区に国府関連集落に伴う小鍛冶工房集中地区がある可能性を考えた。郡衙と駅関連鍛冶施設についてもそれぞれ一例づつ挙げたが、まだ確定的とは言えない。

寺院関連について集落内の仏堂施設（村落内寺院）などの建立に際し、鍛冶施設を周辺に設ける場合があると推定した。また寺で使う鍋などを鋳造するケースもある。

数世代にわたる専業的な遺跡として神奈川の数少ない製鉄遺跡の上郷深田遺跡は律令体制に組み込まれた遺跡と考えた。また平安時代中・後期には地方武士階級の興隆に伴って鎧、武器を製造する専業的な鍛冶屋敷も横浜市西ノ谷遺跡で確認されている。

以上、神奈川県の製鉄・鍛冶遺構について、筆者の無知識を承知でまとめてみた。雑ぱくなまとめ方ながらも古代になると遺跡の性格によって鍛冶のあり方も差があると認識できたような気がする。「はじめに」でも記したように、専門研究者にご批判・ご意見をいただき、修正できれば幸いである。

末筆ながら以下の諸氏にはご指導・ご協力・資料提供を賜った。記して感謝したい。
栗原伸好、柏木善治、谷口肇、及川良彦、山口正憲、加藤久美、植山英史、依田亮一、
佐々木健策、伊丹徹、大上周三（敬称略、順不同）

参考・引用文献

明石新　1992『天神前遺跡第７地点』平塚市教育委員会
穴澤義功　1991「関東地方」『日本古代の鉄生産』たたら研究会
伊藤正義ほか　1986『奈良地区遺跡群』Ⅰ下巻　奈良地区遺跡調査団
河合英夫　2001『岡上－４遺跡　第２地点』岡上－４遺跡遺跡発掘調査団
河合英夫　2003「岡上廃寺出土の平瓦一枚作りの年代について」『多摩考古』33　多摩考古学研究会
柏木善治・依田亮一　2003『湘南新道関連遺跡発掘調査概報』（財）かながわ考古学財団
北川吉明　1999『中荻野稲荷木遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
合田芳正ほか　1987『海老名本郷』Ⅲ　本郷遺跡調査団
香村紘一ほか　1997『及川天台遺跡』国道412号線遺跡発掘調査団
川上久夫　1976「中谷遺跡」『港南台』神奈川県教育委員会
栗山雄揮・菅沼圭介　1997『天神前遺跡第10地点発掘調査概要』平塚市教育委員会
小池聡ほか　1993『平和坂遺跡』平和坂遺跡発掘調査団
小島弘義ほか　1988『諏訪前Ｂ・高林寺』平塚市埋蔵文化財シリーズ６　平塚市教育委員会
境雅仁・浅野哲哉ほか　1999『愛名宮地遺跡』愛名宮地遺跡調査団
坂本彰ほか　1997『西ノ谷遺跡』（財）横浜市ふるさと歴史財団
坂本彰・伊藤薫ほか　1996『鉄製品の生産・流通と武士団』横浜市歴史博物館
坂本彰・鈴木重信　1984「横浜市北川貝塚の調査」『第８回神奈川県遺跡調査・研究発表会』要旨
佐々木稔　2000「坪ノ内・宮ノ前遺跡出土遺物の金属学的解析」『坪ノ内・宮ノ前遺跡』（財）かながわ考古学財団
佐々木稔・赤沼英男・古瀬清秀ほか　2002『鉄と銅の生産の歴史』雄山閣
清水博・市川正史ほか　1987『向原遺跡』神奈川県教育委員会
鈴木重信　1990「権田原遺跡」『全遺跡調査概要』横浜市埋蔵文化財センター
滝沢亮　1993『本郷中谷津遺跡　第８次調査』本郷中谷津遺跡発掘調査団
千葉県立房総風土記の丘　2003『鉄づくり今昔』展示資料
寺田兼方ほか　1997『片瀬大源太発掘調査報告書』大源太遺跡発掘調査団
土佐雅彦　1986「鉄」『日本歴史考古学を学ぶ』下　有斐閣
林原利明　1996『坪ノ内遺跡発掘調査概要』坪ノ内遺跡調査団
平子順一　1988『上郷深田遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
桝渕規彰・植山英史　1998『池子遺跡群』Ⅵ　（財）かながわ考古学財団
宮坂淳一・宍戸信悟ほか　2000『坪ノ内・宮ノ前遺跡』（財）かながわ考古学財団
村上吉正・宍戸信悟ほか　2003『下寺尾西方Ａ遺跡』（財）かながわ考古学財団
安間拓巳　2000「古代の鍛冶遺跡」『製鉄史論文集』たたら研究会